

「長江」は、鎌倉時代の九条家文書『撰錄渡荘目録』にある「陸奥国 長江庄」で、陸奥国南山の名称で関東の豪族長沼宗政が地頭職として所領化している。陸奥国南山地方は、寛文年間の『会津風土記』記載の湯原郷、九々布郷、檜原郷、田島郷、針生郷、関本郷の大川流域の各郷に立岩郷、伊南郷、伊北郷を加えた地域を指すもので、『大日本地理志料』もこの説に従う。

戦国期に入っても約四〇〇年間は長沼氏が統治したが、永禄一年（一五六八）、会津一円を支配したいとする蘆名氏との抗争に敗れ、長沼氏は蘆名氏の支配下におかれる。約二〇年余りは蘆名氏の時代が続いたが、天正一七年（一五八九）六月五日、伊達正宗が会津の盟主となる。しかし、伊達氏も、ほぼ全国統一をなしつつあった豊臣秀吉の裁定により僅か一年で会津の地を離れ、戦国末期は、以後、蒲生氏、上杉と交代する。

時代は近世となり、再び蒲生氏に引き継がれたが寛永四年（一六二七）に蒲生氏が没し、変わって加藤氏が伊予国松山二十万石から会津四十万石に迎え入れられた。寛永二〇年（一六四三）加藤氏は重臣との不和から突然所領を返上するという前代未聞の事件が発生する。幕府は、会津に三代將軍家光の異母弟保科正之を三万石加増の上も南山地方は幕府領として分割した。しかし、この南山御蔵入領約五万石も、幕末までの約二二〇年間のうち、幕府の直支配はわずか四三年間で、会津藩の預り地として私領同然の統治権をもつて治められている。

下郷町には、中世の館跡が一五ヶ所確認され、南北朝期を下らないとされる重要文化財の「中の沢観音堂」が存在するなど、古くから高度な文化が根ざしていたことが伺え知れる。また、戦国末期から江戸時代初期には、松川組二二ヶ村、檜原組二四ヶ村、弥五島組五ヶ村、小出組九ヶ村の四組六〇ヶ村が確立し、時代が

安定期に入ると、会津と関東を結ぶ重要な街道の宿駅をもつ村々として栄えた。

幕末、戊辰戦争の勃発とともに会津一円は戦火の渦となる。下郷も街道沿いに限らず四方が戦場となり、幾つかの集落は焼き討ちに遭っている。今も、町内のあちこちで会津藩に限らず東西雄藩の藩士の墓が、道の傍らにひっそりと建っているのを見ることが出来る。

時代は明治となり、明治二年には若松県に、同九年には福島県に属する。明治二年の町村政施行とともに、旧村々を合併して檜原村（昭和二年に檜原町）、長江村、二川村、旭田村が誕生し、昭和三年には長江村、二川村が合併して江川村となり、昭和三年に一町二村が合併して現在の下郷町となった。

明治一七年には現在の国道が大川筋に開通し、鉄道も昭和六年には会津若松から湯野上まで、昭和九年には田島町まで延ばされた。産業は飛躍的な発展をみせ、新しい商業集落も形成されたが、反面、江戸時代に宿駅として栄えた旧街道筋の村々は、山間の村と化していった。

第三節 下郷町の概況

下郷町の総人口は、昭和三〇年には一四、九七九人であったが、四〇年には一二、五八一一人、五〇年は一〇、二〇八人、六〇年は九、〇三三人、平成七年には七、九五一人と減少しており、減少率は県内でも高いものとなっている。

産業別就業人口の構成比をみると、昭和三〇年に全体の七五％を占めていた第一次産業は、昭和五〇年には四七％、平成七年に